

# テキストマイニングによる 『第二規律の書』の計量的分析

川 脇 慎 也

## 1. 目的と課題

本論文の目的は、『第二規律の書』(*the Second Book of Discipline*, 1578) の特徴を計量的分析によって明らかにすることである<sup>1</sup>。2<sup>nd</sup>BD は教会と世俗それぞれの行政を明確に峻別し、司教制を廃して長老主義的な教会統治の礎を築いた<sup>2</sup>。言い換えれば、それはメルヴィル (Andrew Melville, 1545-1622) による宗教改革思想の具体化でもあった<sup>3</sup>。

なぜ、新たな『規律の書』をまとめなければならなかったのか。スコットランド改革派教会は、『スコットランド信条』(*the Scottish Confession*) と『第一規律の書』(*the First Book of Discipline*)<sup>4</sup> という綱領ともいべき2つの書物を、1560年に作成したにも関わらず、である。主たる理由は、2つある。第一に『スコットランド信条』において示された宗教と世俗との間における権能の峻別をめぐる問題である。この信仰告白において、スコットランド改革派教会は聖書主義を採ること、そして世俗権力は「人類の善及び幸福のために、

---

<sup>1</sup> 本論文では、底本として James Kirk. 2005. *The Second Book of Discipline with Introduction and Commentary*. Covenanters Press. pp. 158-244. を用いた。以下、『第二規律の書』を2<sup>nd</sup>BDと表記する。なお、引用時は章・パラグラフ番号を併記する。

<sup>2</sup> Brown (1891, 60-2/訳71-2)、富田 (1995, 42-5)

<sup>3</sup> Donaldson (1965, 149-50;168/訳155-6;172)

<sup>4</sup> 以下、『第一規律の書』を1<sup>st</sup>BDと表記する。

神の聖なる布告によって定められる」のであって「神の代理人」であると宣明された<sup>5</sup>。つまり、スコットランド改革派教会は、世俗権力を否定はしないが、服従もしないというわけである。1560年、この方針は議会によって承認されたにもかかわらず、世俗権力からの教会の独立は、形式的なものにならざるを得なかった。「当時の貴族やレルドは高位聖職者と結びつき、教会財産を私物化することで利益を享受していた」からである<sup>6</sup>。ここに第二の理由が隠されている。そのような既得権益が放棄されるはずはなく、教会に対する世俗権力の干渉という問題は残されたままであった<sup>7</sup>。

しかし、1572年のリース会議を契機に、事態は大きく動き始める。この会議において「王が成年に達するまでは司教および大司教の存続」が認められることになったからである<sup>8</sup>。この決定は司教の存在を認めない『第一規律の書』に反するものであるばかりでなく、モートン伯<sup>9</sup>ら時の貴族たちが司教を通じて聖職禄を手に入れるための手段に過ぎなかった。1574年7月初旬、大陸から帰還したメルヴィルを中心に、2<sup>nd</sup>BD が編纂されるに至ったのである。

さて、このような経緯から2<sup>nd</sup>BD の主題は、1560年以來の懸案の解決である。それは長老主義制度の確立であり、教会の管轄から世俗権力を排斥することでもある。本研究は、先行研究によって示されてきたこのような理解を、計量的分析から再検討するものである<sup>10</sup>。従来とは異なるアプローチによって従

<sup>5</sup> 『スコットランド信条』第18条「それによって偽りの教会から真の教会を見極めるしるし、および、誰が教理の審判者になるのか」、及び第24条「国家の為政者」を参照のこと。

<sup>6</sup> 川脇（2021, 3）

<sup>7</sup> 1<sup>st</sup>BD の主要な関心は、「教会財産をめぐる腐敗を根本から断ち切り、教会財政を健全化するとともに、立て直す」ことであった（Donaldson 1960, 12-4; 1965, 132-53; Kirk 1989, 168-73; 飯島 1993, 362-4; 富田 1995, 35-7; 北 2003, 63; 原田 2017, 48）。しかし、この改革が容易でないことを、宗教改革の指導者たちは十二分に認識していた。1<sup>st</sup>BD は問題の根本的な解決を図るものでなく、改革の方針を示すことで世俗権力から譲歩を引き出すための戦略的な交渉の書であった。cf. 川脇（2021）。

<sup>8</sup> Brown（1891, 53/訳64; 傍点部はイタリック、傍点は訳者によるもの）

<sup>9</sup> 第4代モートン伯ジェームズ・ダグラス

<sup>10</sup> テキストマイニングの手法については樋口（2020）及び小峯（2021）を参考にした。

来の知見を補強するとともに、新たな解釈の可能性を探りたい。

## 2. 共起ネットワーク分析

まず、言語の出現回数を見てみよう。本稿においては、抽出して分析する対象を名詞のみに限定した。これはある文章において特定の対象を取り上げる場合、名詞で示される可能性が高いことによるものである<sup>11</sup>。表1は、*2<sup>nd</sup>BD*において登場する語を、出現回数の多い順に150語並べたものである。「kirk」が突出して多く用いられており、純粋な名詞ではそれに次いで「word」「office」「power」「ordour」「place」「man」「ministeri」「ministrie」と順に続く。重要語句が必ずしも頻出単語とは限らないけれども、少なくともこのような単語によって示される意味は軽視すべきでない。*2<sup>nd</sup>BD*においては、「教会」「言葉」「職場、役割」「権力」「秩序、命令」「場所」「人物」「部門、職務」に対して、多くの言及がなされていることがわかる。

<sup>11</sup> この方針については、川脇（2023, 2-3）を踏襲した。本論文におけるテキストマインニングは、KH Coder 3を使用した。恣意性の排除という観点からノイズ除去は実施せず、ソースデータをデフォルト設定で分析したものである。デフォルト設定では、「thay」「thair」「thame」「ar」など、名詞以外も抽出される。再現性担保の観点から、本稿では出力結果をそのまま掲載している。

表1 2<sup>nd</sup>BD 頻出150語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
kirk	131	commoun	10	executioun	6
ane	74	discipline	10	extraordinar	6
thay	57	estait	10	faythfull	6
thair	52	magistrat	10	goveament	6
word	52	pasture	10	hurt	6
office	48	religioun	10	lauchfullie	6
thame	46	sum	10	magistrati	6
ar	39	boundi	9	maner	6
ecclesiasticall	35	congregatioun	9	memberi	6
quhilk	35	eldari	9	necessar	6
aucht	34	flok	9	part	6
uther	33	frome	9	qualifeit	6
power	32	generall	9	respect	6
ordour	30	jurisdiction	9	salbe	6
bot	26	pasturi	9	sic	6
place	25	peple	9	tymi	6
sould	25	realme	9	auctoritie	5
spirituall	21	renti	9	bischoppi	5
thairof	21	sa	9	cane	5
onlie	20	thairfoir	9	caus	5
man	18	assemblie	8	certane	5
ministeri	17	personi	8	congregationi	5
ministrie	17	twa	8	cravi	5
ony	17	upone	8	distributioun	5
quha	17	yit	8	doctouri	5
guid	16	apostle	7	doctrene	5
name	16	benefice	7	effairi	5
callit	15	corruptioun	7	eftir	5
persone	15	elderschip	7	eldar	5
prince	15	extemall	7	elderschippi	5
appointit	14	functioni	7	fra	5
kirki	14	kingdome	7	greit	5
gif	13	kingi	7	ground	5
godlie	13	lauchfull	7	heid	5
patrimony	13	lyk	7	jugement	5
policie	13	ma	7	landi	5
tyme	13	minister	7	law	5
war	13	nather	7	lawi	5
charge	12	scole	7	maneri	5
thai	12	selfi	7	ordinar	5
thingi	12	use	7	papistical	5
assemblei	11	utheri	7	parliament	5
conscience	11	auld	6	provydit	5
functioni	11	awin	6	publick	5
haill	11	brethrene	6	reformit	5
he	11	civile	6	rest	5
libertie	11	consent	6	sacramenti	5
title	11	deaconi	6	spirit	5
ather	10	doctour	6	teindi	5
befoir	10	eldarschip	6	thairin	5

次に、共起ネットワークで確認しよう<sup>12</sup>。図1は、 $2^{nd}BD$  全体の単語同士の関係を可視化したものである。まず「kirk」「word」「ordour」という頻出語が点線でつながっていることがわかる。この3語は、それぞれが直線で結びつくグループを、別のグループとつなぐ結節点としての役割を果たしている。

「kirk」「ordour」「guid」の結びつきは、教会と良き秩序との関係を示唆するものである。また、「kirk」「word」「spirituall」「power」「policie」「hail」「discipline」の結びつきは、精神的領域における権力と、全体の方針・政策・規則を示すものとしての教会の言説を想起させるものである。図の左側には

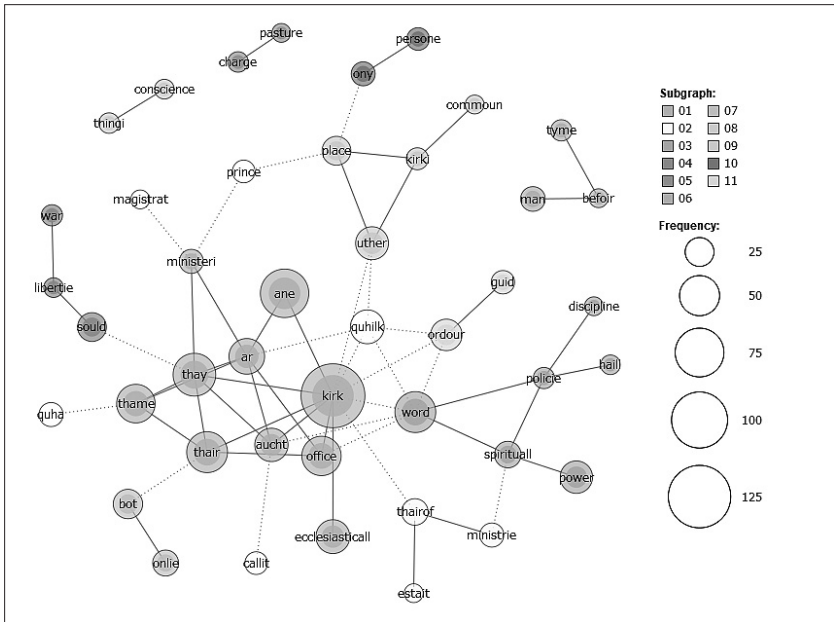


図1 全体の共起ネットワーク

<sup>12</sup> 共起ネットワークは「共起の程度が強い語を線で結んだネットワーク」である。本稿におけるそれは、「KH Corder」のデフォルト設定のまま Jaccard 係数をもとに描写されたものである（樋口2020, 39:182-3）。

「war」「libertie」「sould」の結びつきが示されており、自由と闘争とが、関係づけられている。さらに、その右上方には「charge」「pasture」の結びつきがある。これは、いわゆる「propria grex」であろう。つまり、狭義には、教会の任務にあたる役職たちの担当信者に対する責任を意味し、広義には教会の負う責任全般を示唆しているように思われる<sup>13</sup>。

2<sup>nd</sup>BD は、全13章で構成される<sup>14</sup>。したがって、全体の共起ネットワークで示された関係を把握しようとするれば、各章において用いられる語の偏りを踏まえる必要がある。表2は、各章の特徴語を示したものである。1～13のラベルは、2<sup>nd</sup>BD の章番号を表す。また、単語横に付された数値は、それぞれの語と各章との関連を Jaccard 係数で示したものであり、数値が高いほど、それぞれの部において特に特徴的であることを意味する<sup>15</sup>。また、これまで注目した語について、背景色を変えて確認すると、その他の章に比べて若干ではあるが、第1、7、11、12章に特徴的である。

<sup>12</sup> 共起ネットワークは「共起の程度が強い語を線で結んだネットワーク」である。本稿におけるそれは、「KH Corder」のデフォルト設定のまま Jaccard 係数をもとに描写されたものである（樋口2020, 39:182-3）。

<sup>13</sup> “All thais office-beraris sould have thair awin particular flokis amangis quhome thay exerce thair charge.” (2<sup>nd</sup>BD, III-15)

<sup>14</sup> 2<sup>nd</sup>BD の目次は、以下のとおりである。

- 第1章 教会とその行政一般について、また世俗の行政との相違点について
- 第2章 教会の行政が担う部分と、その執行が委ねられている人物、あるいは役員について
- 第3章 教会の任務を担う人は、どのようにして役職に任命されるか
- 第4章 特に役員について、最初に牧師について
- 第5章 教師とその職務、また学校について
- 第6章 長老とその職務について
- 第7章 長老会、教会法廷、教会訓練について
- 第8章 教会での最後の常置の機関である、執事とその職務について
- 第9章 教会財産とその配分について
- 第10章 教会のなかでの、キリスト者行政官の職務について
- 第11章 教会に今も残存し、改革が望まれる悪弊について
- 第12章 私たちが希う宗教改革についての、いくつかの特別な項目
- 第13章 この宗教改革により全身分がこうむる益について

<sup>15</sup> 樋口（2020, 39:211-4）

表2 章別特徴語

1		2		3		4	
magistrat	. 292	functioni	. 267	quhilk	. 122	flok	. 222
spirituall	. 290	sum	. 177	ordinatioun	. 118	pasture	. 158
power	. 250	tyme	. 167	tak	. 118	-lsb-_NN	. 154
onlie	. 250	govemit	. 167	persone	. 115	fear	. 154
exercit	. 174	govemouri	. 167	thay	. 113	hime	. 154
extemall	. 174	necessarie	. 167	sould	. 111	lauffull	. 133
ministeri	. 161	reulit	. 167	appointit	. 111	eftir	. 125
govemament	. 160	administratioun	. 154	ony	. 111	maneri	. 125
ane	. 134	ordinarie	. 154	testimony	. 111	ministrie	. 115
word	. 133	policie	. 150	thir	. 105	elderschip	. 111
5		6		7		8	
doctour	. 714	pastouri	. 167	power	. 216	deacone	. 250
gift	. 333	eldari	. 136	assemblie	. 191	takine	. 222
pasture	. 250	cairfull	. 118	guid	. 179	functioun	. 200
eldar	. 222	number	. 118	ecclesiasticall	. 171	almous	. 143
minister	. 182	office	. 111	jurisdiction	. 130	collektioun	. 143
scole	. 182	swa	. 105	thair	. 125	dectioun	. 143
amang	. 167	cane	. 100	assemblei	. 125	faithfull	. 143
applicationi	. 167	doctouri	. 100	boundi	. 125	juigment	. 143
cairfullie	. 167	executioun	. 095	haill	. 115	menni	. 143
catechesar	. 167	apostle	. 091	thingi	. 115	olectit	. 143
9		10		11		12	
applyit	. 300	ministrie	. 250	bot	. 250	place	. 265
use	. 250	thairof	. 217	sould	. 220	libertie	. 179
patrimony	. 222	godlie	. 188	realme	. 200	prince	. 167
canoni	. 222	namelie	. 182	papistical	. 185	thair	. 160
collectit	. 222	awin	. 167	kirk	. 178	kirk	. 152
custome	. 222	kingi	. 167	place	. 171	generall	. 148
gudi	. 222	magistrati	. 167	ather	. 167	ordour	. 146
utilitie	. 222	hurt	. 154	ar	. 157	parochi	. 136
gevin	. 200	scole	. 143	libertie	. 152	cuntrie	. 130
possessioni	. 200	yit	. 133	thay	. 150	effect	. 130
13							
justlie	. 333						
selfi	. 300						
comfort	. 250						
occasioun	. 250						
greit	. 222						
salbe	. 222						
kingdome	. 200						
part	. 200						
respect	. 200						
quha	. 177						

第1章と第7章における特徴語は、図1の中心から右下方向に示されている「ordour」「guid」の語群と、「word」「spirituall」「power」「policie」「hail」「discipline」の語群と重なることが多い。第11、12章に特徴的な「sould」「kirk」「place」「libertie」「place」「ordour」は、おおよそ図1の下半分に跨る語群である。このように整理して間違いのないとすれば、全体の共起ネットワークは、各章に特徴的な語の関係が反映されていることになる。この関係は、共起ネットワークの外部変数を章に変えた場合にも確認できるであろうか。

図2は、全体の語と外部変数・見出しの共起ネットワークを可視化したものである。この図においても第1、7、11、12章の結びつきを確認できる。だが、このグループは、さらに広がりをもつものである。第1章は「word」を介して第2、13、10、4、5章のグループと結びつき、「spirituall」を介し

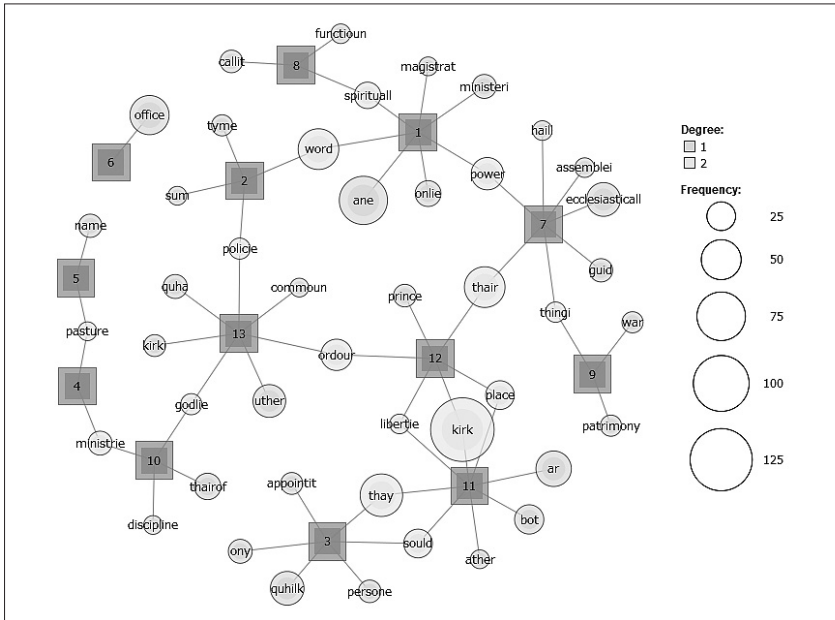


図2 全体の語と外部変数・見出しの共起ネットワーク



て第8章とも関連づけられる。第7章は「thingi」を介して第9章と、第11章は「thay」を介して第3章との関係が示唆される。第6章は、その他の章から独立しており、その意味で特徴的であるといえよう。

### 3. 対応分析

共起ネットワーク分析から浮彫された各章の関係性は、定性分析に基づく先行研究によって示されてきた理解とは明らかに異なる。富田(1995, 44)は以下のように分類しており、これが一般的な理解といって差し支えない。

第1、2、10章は、聖俗の統治についての原則論、第7章は具体的な教会統治の方法を、第3、4、5、6、8章は、教会の役員の任命と4つの職制のそれぞれについて述べている。教会財産については第9章があげられている。第11章から第13章までは、現状の問題点を指摘し改革を要請するかたちをとっている。文書の量は『規律の書』の半分以下となっており、これは『規律第二の書』の焦点が、政教関係、教会組織のあり方、及び、教会財政の3点に絞られた結果である。

本稿において確認してきた定量分析では、この定性分析とは異なる解釈の可能性が示された。第13章は「聖俗の統治についての原則論」としての第2章と第10章とを仲立ちする箇所として位置づけられ、「教会の役員の任命と4つの職制のそれぞれについて」論じられる第3章は、第11章と関連づけられる。「具体的な教会統治の方法」と「教会財産」とを取り上げる第7、9章は、独立したものではなく、それぞれが関連すると同時に、さらに第9章は第7章を介して第1、12章へとその関係が全体的かつ広範に広がっていく構成として描き出されていた。

このような章同士の関係あるいは類似について、図3は全体の対応分析結果

をバブルプロットで示したものである。

図3において、 $2^{nd}BD$ における項はマーク(□)と数字で示され、単語は○で示されている。「KH Corder」における「対応分析のプロットでは、出現パターンに取り立てて特徴のない語が原点(0, 0)付近にプロットされ」、さらに特徴的である語ほど原点から離れて示される(樋口 2020, 43)。したがって、「kirk」「man」「ordour」「ministrie」「ministeri」などの原点付近にプロットされた語は $2^{nd}BD$ における特徴的な語ではなく、それに対して「magistrat」「spirituall」「power」などは特徴的な語である、ということになる。また、縦軸と横軸にはそれぞれ寄与率が示されている。図3では横軸の成分1は18.28%、縦軸の成分2は14.91%である。寄与率の高い成分1に注目すると、第1章が明らかに他の各章から離れてプロットされており、特徴的で

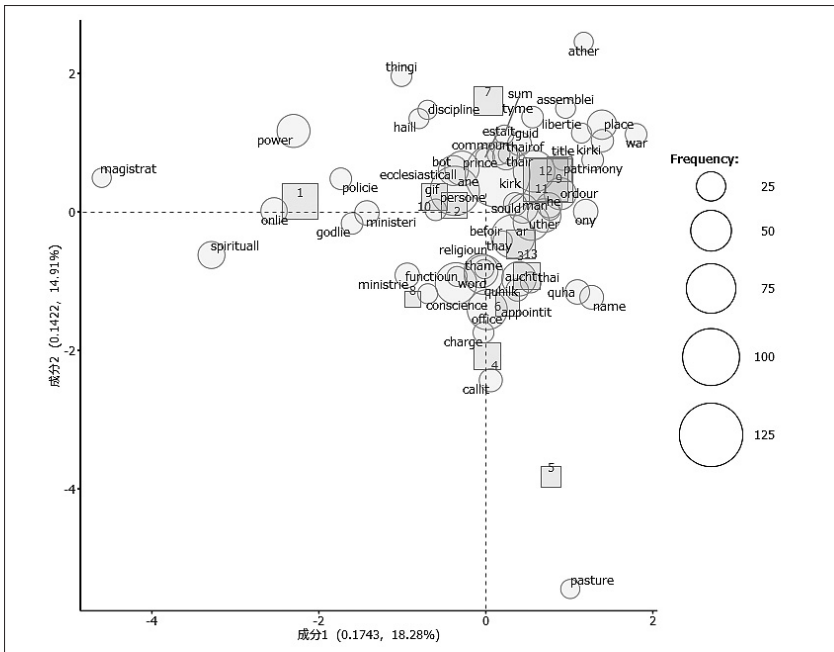


図3 全体の対応分析結果 (バブルプロット)

あることがわかる。バブルプロットで描かれた図は、語の Frequency を視覚的に確認できる。しかし、今回のように各語・章が密集しているケースでは、それぞれの関係を把握し難い。図4は、それぞれの語・章を単にプロットしたものである。

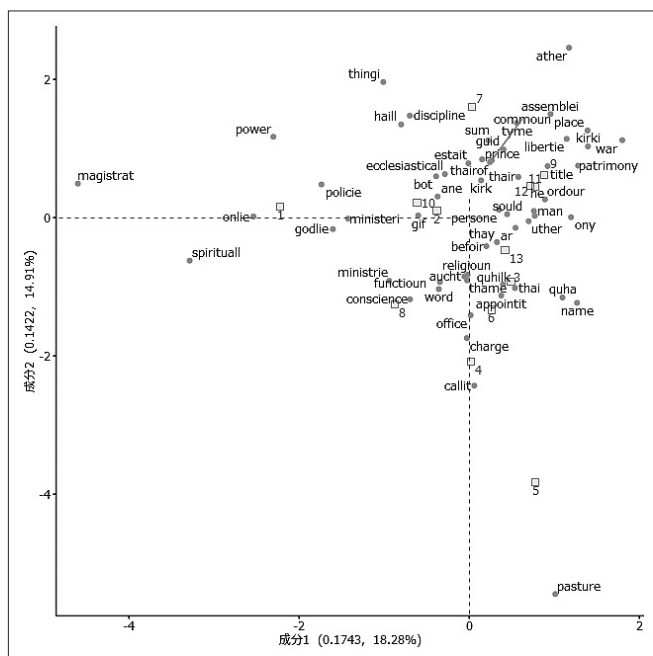


図4 全体の対応分析結果（非バブルプロット）

寄与率の高い成分1に注目すると、第2・10章、第3・13章、第4・7章、第5・9・11・12章が、それぞれ近い内容である。寄与率の低い成分2に注目すると、1・2・10章、第5・8章、第9・11・12章が、それぞれ近い内容である。全体の対応分析結果をみても、 $2^{nd}BD$ の構成に対する従来の解釈は、特定の章同士を同カテゴリーとして考えるにしても、その関係は並列的なものでなく、再解釈あるいは拡張できる可能性が示唆されている。

## 4. おわりに

本論文においては共起ネットワーク分析と対応分析とによって、 $2^{nd}BD$  の計量的特徴を明らかにしてきた。両分析を通して、従来の理解とは異なる解釈あるいは、従来の理解をさらに拡張できる可能性を確認できたと同時に、これまでとは異なるアプローチで、新たな研究の方向性を模索できることも示せたのではないだろうか。

$2^{nd}BD$  の主たるテーマは、宗教と世俗との間における権能の峻別をめぐる問題と、教会に対する世俗権力の干渉という問題とであった。さらに、このような問題は、スコットランド改革派教会の綱領が定められた1560年以降の懸案であったことも、既に指摘した通りである。このような問題の継続性あるいは連続性に焦点を当てるならば、 $2^{nd}BD$  の解釈もまた、2つの綱領との継続性あるいは連続性との関係で解釈されなければならない、ということになる。2つの綱領においては教会の理念、教会行財政制度の改革と教育制度の整備が掲げられていたことを思い返すならば、 $2^{nd}BD$  はコモンウェルスに対する視角から再構築・再解釈されうるように思われる。本論考においては、その核心に迫ることはできなかったが、この点については稿を改めて論じることとした。

## 付記

本論文は、2023年度九州国際大学社会文化研究所共同研究費の助成を受けて行った研究成果の一部である。

## 参考文献

Brown, Thomas. 1891. *Church and State in Scotland: A Narrative of the Struggle for Independence from 1560 to 1843*, MacNiven & Wallace, Edingburgh. 松谷好明訳

- 『スコットランドにおける教会と国家』 すぐ書房, 1985年.
- Cameron, James K. 1972. *The First Book of Discipline*. the Saint Andrew Press.
- 飯島啓二訳「規律の書 (1560/61年)」出村彰・丸山忠孝・飯島啓二訳『宗教改革著作集 第十巻』教文館, 1993年: 203-72, 281-90.
- Donaldson, Gordon. 1960. *The Scottish Reformation*. Cambridge University Press.
- . 1965. *The Edinburgh History of Scotland Vol. III Scotland: James V - James VII*. Oliver & Boyd. 飯島啓二訳『スコットランド絶対王政の展開 十六・七世紀スコットランド政治社会史』未来社, 1972年.
- Kirk, James. 1989. *Patterns of Reform —continuity and change in the reformation kirk—*. T&T Clark.
- 飯島啓二. 1993. 「ジョン・ノックス『規律の書』(一五六〇/六一年)」『宗教改革著作集 第十巻』(出村彰・丸山忠孝・飯島啓二訳) 教文館; 361-87.
- 川脇慎也. 2021. 「『第一規律の書』の理念と特質」『教養研究』(九州国際大学) 28(2): 1-16.
- . 2023. 「テキストマイニングによる『第一規律の書』の計量的分析」『教養研究』(九州国際大学) 23(3): 1-22.
- 北政巳. 2003. 『スコットランド・ルネッサンスと大英帝国の繁栄』藤原書店.
- 小峯敦. 2021. 『テキストマイニングから読み解く経済学史』ナカニシヤ出版.
- 富田理恵. 1995. 「スコットランド宗教改革と2つの『規律の書』」『歴史学研究』(歴史学研究会編) 668: 32-47, 64.
- 原田浩司. 2017. 「スコットランド宗教改革における『監督』(Superintendent)をめぐる一考察」『人文学と神学』13: 47-62.
- 樋口耕一. 2020. 『社会調査のための計量テキスト分析 第2版』ナカニシヤ出版.

## A Quantitative Analysis of *the Second Book of Discipline* Using Text Mining

Shinya Kawawaki

The purpose of this paper is to characterize *the Second Book of Discipline* (hereafter, *2<sup>nd</sup>BD*) through a quantitative analysis. Why did the Reformed Church of Scotland have to compile this book? There are two main reasons. The first is the question of the distinction between religious and secular authority as expressed in *the Scottish Confession*. In the Confession of Faith, the Scottish Reformed Church declared its commitment to biblicism and to neither deny nor submit to secular authority. Despite the approval of this policy by Parliament, the independence of the church from secular power was not guaranteed. This was the second reason. Such vested interests could not be easily abandoned, and the problem of secular interference with the Church persisted. The subject of *2<sup>nd</sup>BD* was the solution of this problem. It is the establishment of the Presbyterian system and the exclusion of secular power from the jurisdiction of the church. In previous studies, the chapters comprising *2<sup>nd</sup>BD* are considered to be organized into five groups. The results of the correspondence analysis are consistent with the conventional understanding. However, the co-occurrence network analysis, which visualized the connection between chapters and words, confirmed a different relationship between chapters than that proposed by previous studies. This leaves room for a different interpretation from the conventional understanding, indicating that the issues of church administrative and financial reform and the independence of the church from secular power must be reconsidered as a commonwealth issue if the continuity between the two “Books of Discipline” is emphasized.